

「いのちよし」「地球よし」「未来よし」の 「新三方よし」で築く日本の未来

I-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社
代表取締役社長
岡本 和久 氏



証券マンとしてニューヨークなどで働き、帰国後、外資系投資顧問会社を設立。2005年、年金運用の受託資産額で業界トップとなったのをきっかけに、投資教育家へ転身した岡本和久さん。現在は「ためる」「つかう」「ゆずる」「ふやす」という「ハッピー・マネー」®四分法」を中心に、お金と心の幸せな関係について、子どもから大人まで幅広い人々を対象に講演・執筆活動を行っている。

幸福感という観点から寄付や投資、お金の使い方を考える、ユニークかつ説得力にあふれる話を聞いた。

長い時間軸と 広い空間軸を持つ

現在、全国の小中高校の教室で、ライフワークとしてマネー教育を行っている岡本和久さん。そのキャリアのスタートは証券会社勤める証券アナリストで、その経験を通じて、お金と幸せについて深く考えるようになったという。

「東京とサンパウロで2年ずつ仕事をしたあと、ニューヨークに9年間勤務したのですが、この街で素晴らしいフランド・マネジャー

やアナリストに出会い、薫陶を受けたんです。なかでも私が一番影響されたのがジョン・テンブルトン卿という伝説的な投資家です。

彼からいただいた著書に、投資で成功するために必要な3つのことが挙げられていて、それに感動しました。ひとつ目が「富を分かち合うこと」、2つ目が「雑事を離れること」、3つ目が「祈ること」。これは神頼みというより、祈りを通じて、静かな心で投資判断をするということでしょうね」

テンブルトン卿は1930年代の大不況のアメリカで1ドル以下の株を大量に買って成功をおさめた。その後、50年代から発展途上の日本株を大量に買い、80年代中頃、日本のバブルが始まる時にはほぼ売却、アメリカ株にスイッチ。アジア通貨危機のときには韓国株を大量に買い、香港が中国に返還されたときは中国株を買うな

ど、時代の大きな流れを読んで投資を行うという手法を取ったのだという。

「みんな、株価が上がった、下がったと大騒ぎをしています、日々のマーケットは海の表面のようなもの。みんなはその小さな波で儲けようとするから、失敗して溺れるんですね。しかし海を深く潜ると、力強い潮流があり、そこに身を任せれば自然とうまくいくものです。そのためには、長い視野で世の中の流れを見ていく。また日本という狭いマーケットだけにとらわれず、全世界の投資対象を視野に入れて、投資をする。つまり、意識の時空を広げて、長い時間軸、広い空間軸を持つことが大切なのです」

そして、この「時間と空間の意識を広げ、遠い将来のこと、広い世の中のことを考える」という発想が、実はテンブルトン卿のような投資家だけでなく、一般の人々にとつての「幸福になる」お金の持ち方、使い方と深く関わっているのだと岡本さんは言う。



ハッピー・マネー®・ビッグの「ピギーちゃん」貯金箱

寄付で幸福感を得るのが 超マネー投資

子どもたちを対象にマネー教育を行うとき、岡本和久さんの相棒は、かわいいブタの姿をした貯金箱「ピギーちゃん」だ。プラスチック製のブタのボディにはお金を入れる穴が4カ所開いていて、それぞれ

れ「ためる(save)」「

つかう(spend)」「

ゆずる(donate)」「

ぶやす(invest)」

という目的別にお金を4分割できるようになっている。

「ためる」に入

れたお金は、今の欲求を抑えて、少し先に、より価値のあるものを手に入れるための貯金だ。

「つかう」に入

れたお金は今、欲しいものを買うためのもの。欲しい

ものリストを作つて順番をつけ、本当に欲しいもの、必要なものから買うというお金の使い方を身につける一歩となる。

「ゆずる」は寄付のためのお金だ。お金には人を笑顔にするパワーがあり、寄付を通じて人を喜ばせることで、自分も喜びを得ることができる。

「ぶやす」とは、今、自分が必要としていないお金を投資という形で会社にまわし、より良い社会をつくるために役立てること。投資をした会社が世の中から感謝されて収益が上がると、その一部を受け取ることでお金が増えていくという仕組みだ。

「お金は持っているだけでは幸せにはなれない、それをものやサービスに変えることで幸福感を得られるのです。そのとき、自分が何に幸福感を感じるのかがキーポイント

になります。人によっては銀座で豪遊することが幸福かもしれませんが、

でも一方で本当に困っている人にもいます。幸福感が欲しくてお金を使うのですから、ものやサービスを購入するのでなく、寄付を通じて直接、幸福感を得ることもできる。お

金を介在しない投資ということで

「超マネー投資」と呼んでいます」
岡本さん自身も、自分の体験で寄付について考えることがあったという。

「父が亡くなった時、お香典を寄

付して、ラオスに学校を建設したんです。父は早くに両親を亡くし、苦学した人だったので、一番喜ぶ思い道だと思っただけですね。掘っ立て小屋がきちんとした学校になって嬉しかったですし、これも結局は投資なんだと、強く実感しました」

お金をいかに有効に使うか。いかに世の中に回していくか。それは最終的には自分が何に幸福感を感じるかという「品格」に関わってくる」と岡本さんは言う。

「品格というのは、結局は意識の問題です。今だけでなく、ずっと将来に目を向け、身の回りだけでなく世の中全体を考える。〈三方よし〉という近江商人の言葉が昔からあります。私は〈新三方よし〉を提唱しています。命よし、地球(環境)よし、未来よし。その3つがよくなるような働きかけをしている人は、品格が高いのではないのでしょうか」

**お金の後には
いつも感謝がついている**



人生の目的は、「新三方よし」を推進して、「お金持ち」ならぬ「しあわせ持ち」になること。そのためには「ためる」「つかう」「ゆずる」「ふやす」を通して、時間と空間の意識を広げ、品格ある人間になる。岡本さんは、そんなロードマップを描いて、お金との付き合い方についての考え方を整理している。

「お金とは縁のネットワークを結

ぶものですし、感謝のしるしでもある。そして働くというのには、まさに「はたを楽にする」、つまり周囲の人を楽にしてあげることで、みんなから感謝され、それが自分の収入になる。楽をして儲けることはできないけれど、楽しく儲けることはできる。この話をすると、子どもたちはとても喜びます」

子どもたちを対象にした授業で話をすると、彼らは吸い取り紙のようにメッセージを受け取り、授業の前後で驚くほど変わるのだと岡本さんは言う。

「お金のうしろには、いつも感謝がついていること、いいことをすればありがとうと言われたり、本当の幸せはお金もちになるのではなく、幸せもちになることがわかって、自分のためになりました」（4年生）、「お金にはいろんな使いみちがあり、それを使い分けるのも自分自身だということを深く知りました。これからためる、つかう、ゆずる、ふやすを使いわけていきたい」（6年生）、「普通の大人はへちゃんといいい大学をでなさい」（立派な人間

になりなさい」と抽象的に言うけれど、岡本さんたちは世の中のためになる生き方を示してくれたので、将来のことを具体的に考えるようになった」（中学生）など、子どもたちから届いた感想文を見ると、実の確なことが書かれている。

「日本には寄付文化がないと言いますが、勝手に大人がそう思っているだけで、そもそも子どもたちにきちんと教えることができていない。元来、子どもたちのなかには人助けのために、自分たちが持っているものを少しでも分けてあげようという自然な感覚があるんですよ」

これからは高齢者世代が自らかっこいい生き方をして、その姿を子どもたちに見せて、伝えてほしいと岡本さんは言う。

「自分の孫でなくてもいい。世の中の小さい子どもはみんな自分の孫だと思って、語りかける。それは世代から世代への責任だと思えます」

インタビュー

公益社団法人日本フィランソソピー協会
理事長 高橋 陽子

PROFILE

岡本 和久（おかもと・かずひさ）

I-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社 代表取締役社長

米国コロンビア大学留学後、1971年慶應義塾大学経済学部卒業。日興証券株式会社に入社。75年から9年間のニューヨーク勤務を経て帰国。旧パークレイズ・グローバル・インベスターズ日本法人の代表取締役社長を経て、2005年I-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社を設立、代表取締役社長に就任、現職。日本証券投資顧問業協会理事、同協会副会長兼自主規制委員会委員長、投資信託協会理事、日本CFA協会会長（現在、名誉会長）などを歴任。